

日本に住み、働くということ — 来日するベトナム人留学生・労働者の視点から —

高森 桃子

近年「チャイナプラスワン」として日本企業の注目を浴び、進出企業が増加しているベトナム。以前に増して日越の関係が深まる中、厚生労働省の発表によると日本国内のベトナム人労働者数は2012年の時点で26,828人、2013年に37,537人、2014年に61,168人、2015年に110,013人と右肩上がりに増加しており、2014年から2015年においては実質1年間で倍近くの人数に急増している。また留学生についても、2016年時点でベトナムは在日外国人留学生全体の18.7%を占めており、中国に次ぐ2位となっている。

今回の研究では、彼らベトナム人の文化的背景や価値観と来日後のそれらの変化を探り、ベトナム人として日本で働き生活することが彼ら自身にとってどのような意味を持ち、どのような変化をもたらすのか、また現在の彼らの様子から、ベトナム人留学生や労働者と我々日本人との共生の可能性についてについて明らかにすることを目的とした。

本研究では、半構造化インタビューとフィールドワーク調査の両方を行った。フィールドワークはベトナムの2大都市(ハノイ・ホーチミン)と東京近郊のベトナム人集住地で行った。また、インタビューは在日ベトナム人(社会人・学生)12名と、日本人2名に対して行った。

調査では以下の事が明らかとなった。一つは、ベトナムの都市で見られる Trá dá chém gió (チャダーチェムゾー)や Xe ôm (セオム)といった現地独特の文化の中に、日本と異なる大きな特徴として「境界線のあいまいさ」と「モノとコトのシェア文化」があることである。もう一つは、ベトナムと日本の「働く」ことに対する価値観の違いと、来日するベトナム人各々の中でのそれらの変化についてである。さらに、そうした文化的なバックグラウンドを持つ彼らへのインタビュー調査を通して、ベトナムから日本へと場所を移して働き暮らす中で自身の変化や複数の人に共通してみられる適応の困難さに対し、論文内で明らかにした独自の文化や価値観が影響を与えているということが明らかになった。また共生の可能性について、外国人留学生を主な対象とした日本語学校や専門学校の需要が増加する中で、日本人との接点のない学生が増加しているという事実と実態を明らかにし、それを克服するための案を提示した。

本研究ではベトナム人という大きな枠組みで調査を行ったが、その中でも出身地方や家庭環境、学生時代の経験、職業、会社でのポジション等、諸々の要因によって違いが生まれてくるため、そうした今回よりもさらに細かい所属分類をもとにインタビュー調査、分析を行うことが可能であり、それが今後の課題として挙げられる。

(指導教員 照山絢子)